

# 生活保護受給者の生活現実と就労自立支援プログラム —事例研究：58歳・男性Aさん—

添 田 祥 史

北海道教育大学釧路校社会教育研究室

## Case Study on Recipient of Public Assistance who Participates “Independence Support Project”

Yoshifumi SOEDA

### 1 研究の背景と目的

本稿は、就労自立支援プログラムの参加者に関する事例研究である。稼働年齢層にある生活保護受給者の個別具体的な生活史を描いていく作業を通じて、就労自立支援上の課題と展望を明らかにしていくことを目的としている。

生活保護行政は大きな転換を迎えている。2004年12月、社会保障審議会福祉部会「生活保護制度の在り方に関する専門委員会報告」において、生活保護制度を「利用しやすく、自立しやすい制度」へ改革すべきであるとの提言がなされた。それをうけて、2005年度より生活保護において就労自立支援プログラムが各自治体で実施されている。2006年度より、就労自立以外の日常生活自立、社会生活自立などの支援プログラムも実施されるようになった。

しかし、現場では、受給者の「何」をどのようにエンパワーすればいいのかという見通しさえもてないままに日々の業務に追われているのが実情である。こうした状況に対して、筆者は、成人教育学的なアプローチから実践的示唆を提供できないかと考えた。本研究は、厚生労働科研「生活保護受給世帯の就労自立を促す成人基礎教育カリキュラムの開発」(研究代表者:添田祥史)の一環として位置づく。

本科研は、就労自立にいたるプロセスを成人の学習過程として位置付け、そのために必要なスキルや知識に対する援助実践を成人の基礎教育として体系化・理論化を試みようとするものである。本科研の最終的な目的は、実際に職員が就労支援プログラムを作成する際に参照できるような現場に根ざしたカリキュラムを提案することにある。そのためには、まず受給者の生活実態を詳細に検討していく事例検討の蓄積が不可欠であると考え、本稿執筆にいたった。

本稿で取り扱う事例は、調査時58才の男性、独身(結婚歴有) Aさんである。「働く場」から離れて久しく、保護受給以前は車上で生活をしていた。彼のようなケースでは、ハローワーク連携型の就労自立支援プログラムの活用は厳しい。彼が参加するプログラムは、就業体験のボランティア事業である。本稿は、就労阻害要因が高い受給者の抱える課題について抽出していくことになろう。

### 2 方法

2009年7月、北海道釧路市生活福祉事務所に本科研の予備調査として、「現在、就労自立支援プログラムに参加している方で聞き取り調査に協力してくれそうな方を1名紹介してほしい」と打診した<sup>1</sup>。数週間後、Aさんが紹介された。聞き取り調査は、筆者と共同研究者の野依智子がAさん宅を訪れて行った。

調査で知り得た情報は研究以外に用いないこと、成果発表の際には個人が特定できる情報は掲載しないことを説明した。ICレコーダーに録音する旨を承諾してもらい、約80分間、半構造化インタビュー方式の聞き取りを行った<sup>2</sup>。

インタビューの主な柱は、①生い立ち、②生活保護を受給するまでの経緯、③一日の過ごし方、④就労自立支援プログラムについて、の4つを用意した。

分析の作業は次の手順で行った。聞き取り後、トランスクリプトを作成した<sup>3</sup>。まず、前述のインタビュー項目に即して、データ全体を概観し、関連箇所を大まかにコーディングした。次に、筆者の視点からみて、彼の内的世界を表現していると思われる発言に印をつけていった。発言間の文脈やつながりを意識しながら、Aさんのライフ・ストーリーを解釈していった。その際には、インタビュー時に漂っていた雰囲気や聞き手と語り手の相互作用やニュアンスも含めた解釈を心がけた。

### 3 結果

#### 3-1 Aさんの生活史

1951年、Aさんは釧路市に生まれた。両親と祖父母、7人兄弟の末っ子という家族構成だった。5歳の頃、祖父が経営した旅館を閉じるのをきっかけに20キロほど離れたところに引っ越すことになった。親せきが病院を開業するので手伝うことになったからだ。

高校卒業後も、22、23才頃までそこで暮らしていた。就職先は、大手の製紙会社だった。三交代制の職場は、「夜どうしても体に合わなくて」、4年ほどで辞めてしまった。

その後、会計事務所に勤めることになった。従業員15名ほど、「釧路ではおっきい方」だった。通勤の関係で実家を出て一人暮らしをすることにした。会計の知識がまったくなかったため、自らの判断で、通信教育で簿記2級を習得することを決め、見事合格した。29才の頃、Aさんは結婚する。2人の子どもにも恵まれた。25年ほど勤めた後、47才で退社した。理由は、所長と折り合いが悪かったというのが一つ。もう一つは、勤務状況が過酷だったことに加えて、若手社員が育たなかったために過酷な勤務状況を長期にわたり続けなければならなかったからだという。

僕の場合は、地方のお客さんっていうのかな、根室や標津方面の。夏場はいいんですけど、冬のあの吹雪、雪。釧路市よりもすごいですよ。そういう面と、若い人がなかなか育たなくて、自分の負担が、もう最後の方だと家に仕事をもち帰って、残業して、その後も、家で仕事をするような状態が続いて。これはやっていけないかなあていう感じと合わさって、やめたような格好ですね。

退職後、知人の建設会社で、あいている時間に会計簿の手伝いしていたところ、正社員になるよう求められた。しかし、数年後、不況の煽りで倒産。多少のアルバイトはしたことがあったが、その後、「ほとんど仕事がないような状態」になった。

数件ほど知人から帳簿の整理を頼まれることがあったが、「アルバイト程度」だった。そうした生活が2、3年続いた。定期的な収入が見込めなくなり、自宅のローンは残り、借金問題もあり、離婚することになった。

### 3-2 生活保護を受給するまでの経緯

離婚後、「着のみ着のままですべて全部もう何も持たないで家をでた」。60歳になれば厚生年金が支給されるが、当時Aさんは、54才だった。車はあったものの、部屋をかりて住むほどのお金は持ちあわせていなかった。

最初の数カ月のうちは、何回か知人宅に泊めてもらったが、やがて車で寝泊まりするような生活になった。家を出た後、家族とは完全に関係が切れていたわけではなかった。車を停めてある場所は知っていたという。携帯電話をもっていたので、連絡をとりあうことはできた。たまにお風呂を借りることもあったという。

56歳の時、Aさんは生活保護を申請した。釧路市の隣町にある量販店の駐車場に車を止めて生活していたところ、巡回中の警察官に出会う。その警察官のすすめで生活保護を申請することになった。

量販店の駐車場にこう停めてたんですけど、そこで巡回中のおまわりさんと出会いました。ま、こんなことをしててもあれだから、市役所にいきいてやるから。こんな状態だ、こう説明していきいてあげるから申請しなさいってということで、一緒に行ってもらって。

Aさんが車で寝泊まりしていた釧路市近辺は、冬は大変厳しい地域である。真冬には氷点下20度近くまで冷え込む。車内でさえ、相当に厳しい寒さになる。Aさんは、極寒の地で一冬過ごしたのである。

現在住んでいるアパートは市から斡旋された。他の入居者にも受給者が多いという。

### 3-3 生活保護受給後の生活

Aさんは、離婚後のごたごたで「かなり疲れた」。家を出た時は、なかば自暴自棄だったという。車での生活は彼から二つのことを奪っていった。一つには、日常生活を営むに必要な体力である。彼は、生活の変化について、次のように述べた。

決定的に変わったのは、三食べれるようになったことですね。車の中のときは、1日1食か2食。食べる元気もないですからね。もうとにかくボロボロな状態です。この生活になってから今では駆ぐらいまでなら歩いていけます。ここに住みはじめた当初は、何回か休まないといけないような体力でしたね。

もう一つは、生きていくための意欲や希望であった。離婚時のごたごたから人生に対して、「もうどうでもいい」と思うようになり着のみ着のままの家を飛び出した。そうした自暴自棄の感情は、車で生活するなかで、より大きくなっていった。

なんていったらいいんでしょうかね。もう、疲れたって感じでしょうね。ああ、死ぬ人の気持ちがわかるかなと思うぐらいの感じですかね。

そうした「どうでもいい」という気持ちも、生活保護を受け、安定した生活が確保されたことで変わっていった。しかし、劇的にすべてが好転したわけではない。「マイナス思考」からは抜け出せないという。

どうでもいいってのからは変わりましたね。もう投げやりっていうのかな、そんな感じはなくなって、なんとかせたくかく拾ってもらったっていうか。なんとかとは思いますが、なんか考え方がマイナス思考なんではないですかね。

どうしても、仕事探しながら、ああダメだろうなあという感じが先に出てしまうんですね。どうもね。

月に3、4回は、ハローワークに行き求職活動をする。会計事務所での仕事には、やりがいを感じていたので、できれば似たような仕事に就きたいと思っている。求人情報には事務職がないわけではない。年齢や性別での制限はないことになっている。しかし、とAさんは言う。

そうは言っても、会社はそんなこと望んでませんから

ね。女性の若い人が欲しいのにね60近い男の申し込みだもんね。(略) ハローワークからの帰りは、ほんと寂しい気持ちになりますね。

60も近いような人採ったって何年も使わないでしょ。それで仕事探せと言われても、もうパソコン見て、頭から全部はねられますからね。

Aさんを「寂しい気持ち」にさせるのは、求職先が自分を対象としていないと感じるこに加えて、自らの経験や技量が過去のものになったと感じるからである。会計事務所に勤務していた当時は、パソコンでの処理もそれほど複雑なものではなかった。

「(パソコン操作は)できるの?」で聞かれたら、「できない」と言った方が大正解なわけですね。今だと何につけても(パソコン操作は)必要になってきますよね。別に事務系だけでなくも。

就労自立支援プログラムの一環で、パソコン講座や資格取得支援もある。Aさんは、それらの支援が用意されているのを知っている。「自立」に向けて、どう活用しようかプランニングしてみる。すると、自分がそうした対象から実質的には外れているのだと感じてしまうのである。

年齢的に…、だってこれから勉強して何かの資格…取るって。うーん。それが仕事につながるようなものを考えるんですけど。

こうした思いは、「最近特に」強くなる。今春、一番下の子どもの大学進学が決まった。元妻も含めて、その子を経済的に支える基盤がない。授業料や生活費も含めて返還義務のある奨学金でやりくりすることになる。

初めからマイナスの状態っていうのも可哀そうな気がして。情けない話ですけどね。息子がほんと全部、奨学金のこととか調べてきて、一人でやった。早く行きたかったんだろうなあって。

一日のパターンは次のようであった。朝起きてインスタントコーヒーを飲みながら朝のテレビニュースを観る。食事付きのアパートなので、下に降りて朝食をすませる。職安に行く日は出かける。出かけない日は、飲みかけのインスタントコーヒーを飲みながらニュースの続きを観る。そろそろ掃除をと思い、終わると体操をする。ここまでで、午前10時。近所のスーパーに買い物に行き、自炊し、ひとり昼食をとる。昼食といってもメニューは食パンを焼いて、「せいぜい茹でたものを作る」程度。テレビで耳にした外国語を辞書で引いたりして時間を過ごしているという。

アパートから徒歩15分ほどで図書館や生涯学習施設がある。しかし、Aさんはそれらをほとんど利用しない。

足がなんかね、やっぱりあの生活保護ですか、保護受けているとやっぱり外には出にくいですよ。他の人はわかんないけど、僕は出にくいですね。だから土曜日曜なんかは人がこう出ているので、そういう日はとくに出不いですね。買い物があっても、土日以外の日にしようと思いませんね。

掃除と体操を日課にしているが、気分転換に何をするかを尋ねたが「まったくない」という。お酒が好きなので、街に飲みに行きたいが、「次の日から生活していけなくなる」。かつてはよく観ていたテレビドラマは、「自分とだぶるような場面に嫌なのか」、今は観ない。生活の糧について尋ねたところ、Aさんは丁寧に考えて、こうつぶやいた。

嬉しいこともないですねえ。ほんとないですね。

### 3-4 就労自立支援プログラムに参加して

担当ケースワーカーのすすめで、Aさんは民間の解体業者に週1、2回、4時間作業に従事している。釧路市では、Aさんのような就労阻害要因の高い人のために、「中間的就労」という独自の概念をつくり、社会参加や就労意欲の喚起のための就労体験のボランティア事業を地元のNPOや企業の協力のもと運営している<sup>4</sup>。

自分ではあんまりはっきりとはわからないですけども、接する人からは変わったって言われますね。今までは、ほんとショボンとしていたのが、いづらか前向きになったというか。「良かったね、変わったよ」とは言われますね。

参加後、自分では意識しないが、周囲は変化があったという。「張りが出てきましたね」とAさんは振り返る。生活リズムにも変化がみられた。活動日の前日には夜9時には床に入るという。

一週間に1回でも2回でも仕事にいける。行けるっていうのが、そういう場に参加できるっていうのは、ほんと張りになりますよね。腰痛いとかあち痛いとか言いながらも、やっぱり楽しみです。今、一週間に一度でも。ま、行って仲間とほとんど大した話しないんですよ。バカ話しかせずに帰ってくるんですけども、良かったと思ってます。

Aさんが参加するプログラムには、二十代から五十代まで幅広い年齢の受給者が集う。「ばらばらなんですけど、そういった感じの方が逆に楽しい」。元ひきこもりの若い受給者の参加もある。また、実際に賃労働として雇用されている社員も一緒に汗を流す。

話は全く合わないんですけどもね。また、それがいいんでしょうかね。(略) 同じような立場だと逆に減入るんじゃないでしょうか。

就業体験的ボランティア事業は、生活に「張り」をもたらす。しかし、短時間低賃金でもよいので賃労働の場が欲しいという。

お金が、完全なボランティアだとまたあれなんですよね。(略) やっぱ安い高いは関係なく、いくらかの行動に対する対価があって、そうすると気持ちもまた違いますね。いくらであってもお金もらってるんだ、やってるんだっていう気持ちにはなりません。

(略) 毎日とは言わなくても、週2、3回でもあればだいぶ違うのではないかな、考え方も変わってくるのかな、仕事に対するの取り組み方も違うのかな、ていう感じはあるんですけどね。

## 4 考察

### 4-1 Aさんの語りに通底するストーリー

Aさんは、なぜ生活保護受給にいたったのか。主要産業の斜陽などの外在的な要因に加えて、語りを読み解いていくと次のような側面もみえてきた。

彼は、困難や人生の岐路に直面した際、他者と距離を置き、自力で解決しようとしてきた。高校卒業後、製紙会社に勤めるも、独自の判断で退職。その後、会計事務所に職を得え、自らの判断で仕事に活かすべく通信教育で簿記資格を取得した。離婚時に抱えていた住宅ローンやサラ金も、ひとり地方裁判所に行き、担当者と必要書類などに関するやりとりを数回経た後、自己破産手続きを完了させた。

しかし、その反面、人生の大きな岐路を独断で決めてきた。それは、長年勤めた会計事務所を退職する際も同様であった。同僚に相談することなく、一人で決めた。退社を決意すると書類を誰がみてもわかりやすいようにしたり、身の回りの整理をはじめた。

ほんとに側にいる人はわかったかもしれなです。身の回りというか、書類をある程度誰がみてもわかりやすいような形にしとかないとなんないと思ってやってたから。なんとなくおかしいくらいは思ったかも知れないですね。

また、妻に相談することもなかった。やめてから「やめたあ」という感じだったという。親類に相談することもなかった。「うちのきょうだいて、横のつながりってほとんどないんです。まあそれぞれで、市内に住んでいるきょうだいもいたが、日常的な交流はなかった。退社したことを知った後も、親類からの声かけなどはなかったという。

ほんとに干渉しないっていうか。まったく、そういうの

は、お互いないですね。

Aさんは、直面する課題に対応するために何をすべきかを考え、自力で情報を集め、行動する力に長けた人物である。生活が困窮した際も、親類に相談したり、援助を求めたりはしなかった。自力で乗り越えたいという思いの背景には、他者に頼りたくない、迷惑をかけたくないという思いがあった。家族と連絡を取り合うことはできるが、そうすることはしなかった。こうした他者との距離感は、生活保護受給後の現在にもみられる。

こっちからは、迷惑がかかるかなあと思って電話しませんが。(略) まったくないとね、ほんとに寂しい感じするでしょうけど、なんかあれば。

独りで考え、決定し、責任を負うという彼の生き方が、人生を切り拓いてきたことは事実である。職を転々としても、通信講座で簿記資格を習得する等自らスキルアップし、たやすく仕事にありつけた。しかし、雇用が先細りするなかで、安定した就労の場に戻れなくなっていった。

そうなると彼は、ひとりで責任を抱え込むことになる。個人では解決不可能な危機に直面した際、家族や友人に甘えたり頼ったりすることよりも、ひとり車上で生活することを選んだのであろう。「自立的」に生きてきたという自負があるがゆえに、それが叶わなくなったと感じた時、生きる希望や意欲を根こそぎ奪っていく。彼の人生哲学は、いわば両刃の剣であったのだ。

### 4-2 事例から示唆される就労自立支援上の課題

Aさんの場合、「自立的」たろうとするがゆえに自らを追詰めてきたといえる。ハローワークで求職活動をすればするほど、社会から自分が必要とされていないと感じる。

布川日佐史(2006)によれば、職安との新たな連携の多くは、従来型の就労指導の延長として、稼働能力活用の有無をチェックする手段と位置づいてしまっている<sup>5</sup>。職安との連携型のプログラムの場合、稼働能力があり、就労意欲があり、就労阻害要因がないことが要件となっている。しかし、この条件をすべて満たしていれば、そもそもこの事業を活用せずとも就労できる。また、現在の厳しい労働市場においては、これらの要件を満たしていても、すぐに就労できるわけではない。とくに、Aさんが暮らすような主要産業が斜陽した地方都市での求職は、極めて厳しい状況にある<sup>6</sup>。自信をなくし、意欲をなくす人が当然でてる。こうした人々へ対応するプログラムも必要となる。

Aさんの参加する就業体験的ボランティア事業は、まさにそうしたプログラムの一つである。釧路市では、就労自立までのプロセスに段階を設け、「中間的就労」という独自の概念を提示し、就労や社会参加への意欲喚起をめざしている<sup>7</sup>。車上生活が長かったAさんは、身心ともに「ぼろぼろ」の状態だった。職安との連携型のプログラムでは

稼働能力に不安があるということで、対象から漏れていたであろう。こうした場があったからこそ、Aさんは「前向きになった」と周りから言われるほどに、生活に張りが出てきた。こうした取り組みは、全国的にも注目を浴びている。

しかし、である。これからの展望をみすえる上で私たちが考える課題は、その先にある。Aさんの聞き取り調査からみえてきた検討課題は次の4点である。

第一に、就業体験的ボランティア事業の「報酬」をめぐる問題である。「安い高いは関係なく、いくらかの行動に対する対価があって、そうすると気持ちもまた違いますね」とAさんは言う。この発言から有償ボランティア化を求める前に、ボランティアとはそもそも何なのかに立ち返り考えてみたい。ここに、インターンシップのような仮雇いや見習い制度のような事業とは異なる就業体験的ボランティア事業独自の強みがあるように思うからである。

ボランティアとは、日常の関係性の外にある世界に飛び込む行為である。普通ならば関係をもつことのない知らない人同士が出会い、関係をはじめ。そこでは、自分とは違う他者を受け入れながら、自分でいられるかどうか強く問われることになる<sup>8</sup>。ボランティアとして新たな関係性に身を置くことは、ストレスや不安を感じさせる。しかし、だからこそ、うまく活動に溶け込めたときは、新たに人間関係を築けた自分への誇りや親密な他者を通じて自己を見つめ直す機会となり得る。

しかし、ボランティアとして定着し、やりがいを感じるためには、「報酬」が必要となる。ボランティアといえども、完全な利他的行為ではない。ボランティアが行動するのは、ある種の「報酬」を求めてのことだ。自分が価値ありと思えるものを誰かから与えられることを期待して、行動する<sup>9</sup>。Aさんがボランティア的立場で「報酬」を受け取るならば、彼の求める金銭以外の報酬が何なのかを見極める必要がある。彼の場合は、「働く場」における自己の有用感であり、仲間とのたわいのない雑談ができる日常であり、他者と協同して作業に従事する喜びだったりする。

したがって、それを確実に実感できるような場のつくり方や声かけ等の支援が必要となろう。

第二に、「働く」ことの位置づけをめぐる問題である。このことは、どのような社会を構想するかということにつながる。宮本太郎（2009）は、「生活保障」という視点から次のような提案をしている。人々の生活が成り立つためには、一人ひとりが働き続けることができ、何らかのやむを得ない事情で働けなくなったときに、所得が保障され、あるいは再び働くことができるような支援を受けられる。そうした社会にむけて制度を更新していく必要がある。

宮本の主張の根底には、「生きる場」から排除された人びとに対する社会的包摂という問題意識がある。男性稼ぎ主への依存と家族主義に支えられた日本型生活保障が解体するなかで、「生きる場」を喪失する人々が増えている。人々に必要なのは、誰かのつながりを得て、気かけられるこ

とで、生きる意味と張り合いを見出すことができる場である。存在を承認されてこそ、人は困難に立ち向かう意欲が生まれるのである。

Aさんが喪失したものの、それはこの「生きる場」に他ならない。日常的な交遊関係も薄かった彼にとって、雇用の場から退出し、家族と別れた後は、存在を承認してくれる他者を失っていく。Aさんにとって、就業体験的ボランティア事業は、「生きる場」の再獲得をも意味していた。就労自立支援プログラムにおいては、「働く」ということをより幅広くとらえ、労働を通じた社会参加や社会とのつながりをもとにした生きる意欲を保障するという機能にも留意する必要がある。

ここにおいて、もう一つ重要な論点が浮かんでくる。「中間的就労」の「出口」をどう構想するかということである。段階的に就労にむかうプロセスを自尊感情の回復や社会参加と関連づけて保障したと釧路市の取り組みは、高く評価されてよい。しかし、現場では、その先がみえないという事態が生じている<sup>10</sup>。

50代後半の受給者にとっては、地域経済の回復を待っている時間は、自身の雇用機会を喪失していく時間であり、それは自身の存在意義を揺るがせる時間でもある。賃労働までの準備期間として位置づく限り、「どうしても、仕事探しながら、ああダメだろうなあという感じが先に出てしまう」というように、就労できない自分を肯定できない。

Aさんのような50代後半の受給者には<sup>11</sup>、たとえば、就業体験的ボランティア事業において「働く」ことを個人の就労自立のステップアップとしてのみ設定するのではなく、社会的有用労働（内橋克人）と結びつけて、そこで働き続けることができる仕組みなどが検討されてよい<sup>12</sup>。

関連して、第三に、就業体験的ボランティア事業の成果に関する評価方法をめぐる課題である。釧路モデルは、「何よりも自立は『地域や社会の居場所』をベースに受給者が『地域社会の一員としてエンパワメント』されていくことから始まると考え」ている。その中心にはあるものは、「受給者の自尊感情の回復」である。福祉事務所は、保護廃止数・保護費減額数や医療費抑制などの費用対効果が数値としてみえやすいものは評価できても、「表情がよくなった」「しゃべるようになった」「笑顔が出てきた」という変化や社会との関係を再構築していく中で生まれる受給者のエンパワメントには、評価の方法もなく苦手の分野であった<sup>13</sup>。

釧路市においても、職安連携型の就労自立支援プログラムに比して、就業体験的ボランティア事業における保護廃止数や保護費減額件数は、少ないという。公費を運用する以上、説明責任が求められる。従来の評価軸からも一定程度の評価が得られるような努力を行いつつも、それを補うような根拠を示すことができるような新たな評価軸の作成が求められる。また、収集されたデータを効果的かつ説得的に外部に示していくプレゼンテーションの開発も求められよう。事例研究や質的研究の方法にも視野を広げながら、多様なデータを収集・分析・発表していく手法を現場

# 自己肯定感の獲得プロセスに関する一考察

－冬月荘「Zっと！ Scrum」を事例に－

成澤 弘明・添田 祥史\*

北海道教育大学大学院学校教育専攻

\*北海道教育大学釧路校

## A Case Study of the Self-esteem Acquisition Process

NARIZAWA Hiroaki and SOEDA Yoshifumi\*

Graduate School of School Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

\*Department of Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

北海道教育大学紀要（教育科学編）

第 61 卷 第 2 号 別 刷

平成 23 年 2 月

## 自己肯定感の獲得プロセスに関する一考察

－冬月荘「Zっと！ Scrum」を事例に－

成澤 弘明・添田 祥史\*

北海道教育大学大学院学校教育専攻

\*北海道教育大学釧路校

## A Case Study of the Self-esteem Acquisition Process

NARIZAWA Hiroaki and SOEDA Yoshifumi\*

Graduate School of School Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

\*Department of Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

### 概 要

本稿は、子どもの自己肯定感の獲得プロセスに関する質的研究である。生活保護受給世帯の中学3年生を対象にした高校進学支援事業「Zっと！ Scrum」において、スタッフとしての役割を果たしつつ、約1年間のフィールドワークを行った。事例が提供する時間、情報、アイデンティティといった編成資源（Wallman）の特徴を明らかにした後、それらをどのように活用しながら子どもたちが自己肯定感を獲得していったのかについて、M-GTAを用いてモデル化を試みた。鍵となるのは、仲間やスタッフからの絶え間ない「私」任せのかかわりであった。すなわち、「私」に向けられた言動をどう受け止めどう反応するかは、当人に委ねられるという関係性を基盤に、子どもたちは他者への関心を取り戻し、肯定的な自己へと変化していった。

### 序 章

#### (1) 問題の所在

本研究は、子どもの自己肯定感の獲得プロセスに関する質的研究である<sup>1</sup>。競争原理が社会の隅々にまで侵食する中で、自分の存在や命に価値を見出せない子どもたちが増えている。高垣（2004）は、こうした現状を自己肯定感という概念で説明した<sup>2</sup>。

自己肯定感の高低と進学意欲、学校適応は相関

関係にあることが指摘されており（松井 2001，久芳ら2007），今日，その獲得が子どもの発達支援上の重要な課題として認識されている（中教審2008）。

これまで，自己肯定感に関する研究は，自己肯定感尺度の開発，他の尺度との比較研究などが主であった（田中 1999，松井 2001など）。しかし，子どもたちに自己肯定感の獲得を促すために必要な援助実践の視点や方法に関する研究は，臨床家による提言レベルにとどまり，実証研究の蓄積が

求められる。すなわち、どのようにして子どもたちは自己肯定感を獲得していったのか、それを後押しした環境や条件は何かについて、実際にそれが生じた現場でデータを収集し、分析していく作業が必要となる。本研究は、そうした事例研究の一つとして位置づく。

## (2) 研究方法

フィールドワークは、NPO法人「地域生活ネットワークサロン」が釧路市からの委託を受けて実施している高校進学支援事業「Zっと！Scrum（ずっとすくらむ、以下「スクラム」）」で行った<sup>3</sup>。

NPOでは、「『学習』のとらえかた、学習方法、参加形体などが既存の『教育』や『学習』とは大きく異なり、さまざまなプログラムや実験的な方法が追及されている。知識を与えるタイプの教育ではなく、共に学び、問題に取り組む参加型の学習がおこなわれており、フォーマルな教育の場では自己実現できない子どもや青年にとっても、育ちあうこと、自分を探すこと、人と出会うことなど、『学び』の原点となるような営みが創造されている」（佐藤2004：ii）。こうした地域の取り組みから学ぶことは多い。

スクラムの活動にも、学校教育とは異なる学習集団のつくり方や学習観や発達観が散見できる。参加後、明らかに自己肯定感が高まったと感じられる言動を実際に見聞きできた。さらに、調査研究に対する現場の理解が得やすかったこと<sup>4</sup>、インフォーマントとの関係性がすでに構築できていたことから今回事例に選定した。

筆者たちは、本格的にデータを収集する以前より、ボランティア・スタッフ（以下、チューター）として活動に参加していた<sup>5</sup>。子どもたちの変化を目のあたりにしたことから、研究的にこの実践を分析したいと考えるようになった。

2009年8月から成澤が、現場での印象的なエピソードや言動をフィールドノーツに記録しはじめ、同11月、OB・OGへの個別のインタビューを行った。「明るくなった」「すごく変わった」などのように、自己を肯定的に受け止めるように

なっただと思われる言動がみられた康平君、夏樹さん、麗華さん（全て仮名）をインフォーマントとして選出した<sup>6</sup>。聞きとりは、半構造化インタビューで行った<sup>7</sup>。質問の柱は次の通り。

- ・「スクラム」に参加する前の「私」
- ・「スクラム」に参加した後の「私」
- ・「スクラム」の同年代の参加者
- ・「スクラム」の大人
- ・「スクラム」での悩みや苦しかったこと
- ・「スクラム」に来て取り組んだこと
- ・「スクラム」で嬉しかったこと

データ分析は、2つのステップを踏む。まず、ウォルマン（Wallman 訳書、1984）の提唱する編成資源を特定する（第2章）。それを軸にM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて3名の変化を分析する（第3章）。

ウォルマンは、社会に存在する様々な資源の中でも、土地、労働力、資本といった不平等に配分される資源を構造的資源と呼ぶのに対し、そのコミュニティの成員ならば誰もが利用できる時間、情報、アイデンティティを編成資源と呼ぶ。編成資源をいかに活用するかで、同じコミュニティに属しながらも生活の様式に違いがでてくるといふ。本稿では、劇的な変化がみられた3名に共通する編成資源の活用方法を明らかにすることによって、自己肯定感の獲得プロセスを抽出しようというものである<sup>8</sup>。

M-GTAとは、木下康仁が開発した質的研究の分析方法である。グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、現場の実情からモデルを構築していく手法として有効な手法であり、とくに他者との相互行為の変化の説明に適しているという特性をもつ（グレイザー & ストラウス1967=1996）。M-GTAは、そうしたオリジナル版の特性を確認、復活させ、同時に、そこで未完成のまま課題になっていた部分を独自に解決するために、実際に調査研究を実施した際に生じる問題点を丁寧に検証し



つつ、質的研究の方法論として精緻化を試みている(木下2003)<sup>9</sup>。

以上の手順で行った研究成果の概要を、「スクラム」のチューター会議で報告した。M-GTAでは、現場が納得するモデルを提出できるか否かが成果を評価する際に大きなウェイトを占める。本研究で生成されたモデルに対する評価は高く、その解釈に対しても妥当性が確認できた<sup>10</sup>。

## 第1章 「Zっと！ Scrum」の活動

北海道釧路市米町。神社を右手に坂を登って少しいくと、二階建ての大きな一軒家が見えてくる。NPO法人「ネットワークサロン」が運営する「コミュニティハウス冬月荘」である。電力会社の独身寮を改築した施設は、1階が市民活動の場で、2階が居住空間になっている。縦割り行政の弊害によって、漏れてしまうようなニーズを柔軟に汲みとるべく、道州制モデル事業の一つとして建てられた。

玄関から入るとカウンターが目に入る。床はカーペット敷き、パソコンを利用する2階の住人を横目に、ドアの間隙から見えるのは厨房で昼食を準備する専従の調理担当のスタッフの姿。白熱灯の間接照明が心温かい雰囲気醸し出す。「スクラム」の子どもたちは、冬月荘を「実家のようなところ」、「金持ちの友達の家」と表現している。

「スクラム」は、冬月荘が生活福祉事務所から受託している生活保護受給世帯の中学生を対象とする高校進学に向けた学習支援事業の愛称である。Zは「ずっと続きますように」、「かっこいいから」。scrumは、団結を表すスクラムと塾(cram)をあわせてつくった造語である。初年度、予定した回数が終わった時、存続を希望した当時の子どもたちが知恵と思いを出しあってつくった。学習支援の場とはいうものの、活動は子どもたちの居場所づくりや仲間づくりに重きを置いている。したがって、個別の学習支援だけでなく、全員で話し合っって企画をたて、バーベキューや料理づくりなどの活動も組まれている。

「スクラム」では、中学生以外は、すべてチューターとして呼ばれる。冬月荘関係者、子ども関連の施設職員、生活福祉事務所の関係者、大学生、大学教員など多様な人がチューターとして子どもに関わる。現在では、第1期生、2期生の一部がチューターとして立場を変えて参加するようになっている。

「スクラム」に参加してまず求められることは、自分の呼ばれたい名前を決めることである。これは中学生もチューターも全員である<sup>11</sup>。そのねらいは、「立場を持ち込まない」ことにある。社会的な威信や立場を切り離すことで、対等の関係を確保しようとしている。

チューターとして求められるもう一つの行動原理は、「子どもを評価しない」ことである。厳密にいうと、子どもをいわゆる「良い子」の枠にあてはめて評価することを自制したり、学校での評判や成績を評価軸にしたりしないことをさす。スクラムでのその子にきちんと向き合うことが求められる。基本的にこの2点さえ守れば、子どもたちにどう接するかは、個々のチューターに委ねられる。

おおまかな一日の流れは次の通りである。午前10時頃に集合する。お昼はボリュームも味もよく参加者全員が楽しみにしている。午後1時頃から再開し、3時頃に終了。公共交通機関によるアクセスが難しい者には、送迎がつく。子どもたちの送迎に向かったチューターが戻ってくるとチューター会議が開かれる。会議では、必ず一人一回は発言の機会が用意されている。気になったことや嬉しかったことなどを共有されていく。

## 第2章 「Zっと！ Scrum」の編成資源

ウォルマンは、編成資源として、時間、情報、アイデンティティの3つをあげている。「スクラム」では、それに加え、他の「スクラム」生、チューターという編成資源が存在していた。

### (1) 時間

「スクラム」の時間は、中学生本人がコントロールできる。次の夏樹さんの語りからは、そのことが顕著にうかがえる。

チューターたちは、子どもたちに希望校に合格してほしいと思っているので、勉強するようにはたらきかける。しかし、その最終的な決定権は、中学生に委ねられる。また、勉強時間の長さや内容についても同様である。

夏：そう。だからなんか、学校だったら一時間  
びっちり勉強。

成：そうだね。

夏：でも冬月荘だったら、自分の休憩したい時  
に休憩できるし、わからないところは先生が  
来て、個人的に教えてくれる。

学校での一斉授業の場合、子どもたちが時間をコントロールすることは難しい。わからないことがあっても、授業を中断させることになるので、なかなか聞きづらい。ましてや、初歩の段階でつまづいている場合、なおさらであろう。ここでいうコントロールできる時間とは、子どもたちが時間を遡り、わからない単元から学び直すことができることも含意する。

### (2) アイデンティティ

「スクラム」においては、アイデンティティもまた本人が一定程度コントロールできるものになっている。「スクラム」では呼ばれたい名前を自らにつける。「私」は何者かを本人が名乗る権限を与えられる。子どもたちの多くは、日常的に呼ばれているあだ名などをつけるが、おとなたちは、「たけちゃん」(50代後半・男性)、「おんじ」(60代前半・男性)、「ひおピー」(30代後半・女性)、「パズー」(20代前半・男性)など日常とは異なる「私」を楽しんでいる。こうしたおとなたちを前に、子どもたちは安心して新たな「私」を試すことができる。

また、「スクラム」は、市内の様々な中学校か

ら通ってくる。本人の所属する家庭や学校や地域における「私」をめぐる呪縛から比較的自由になりやすい。日常の人間関係とは異なるある種、非日常的な空間は、「私」とは何者かを表出し直す機会を用意してくれる。

また、インフォーマントの語り方は、学校や家庭での「私」と対比させる形で「スクラム」での「私」を説明することが多く、「スクラム」に対する帰属意識もみられた。

### (3) 情報

「スクラム」では学校や家庭では得られない同じ境遇の他者と出会うことからくる共感的な言葉やポジティブな未来への情報が提供される。そして、それらの情報を受け容れるか否かも、中学生に委ねられる。

康平君は、学校の同級生を「理解しあえない奴ら」と表現する。他方、「スクラム」は、「何でもさらけ出せる場所」だという。そうした関係の基盤となっているのが、なにげない会話の中に同じ「境遇」だからこそ共感できる体験や感情であった。自分の苦しさを理解してくれる他者がいる。

康：最初の時の募集内容の一つとして、あの、  
母子家庭であることが絶対条件だったんだよね。だから、そういう、境遇だから、何となくそんな話になって。うん、辛いよねつってこう。(中略)ここは、そういう、何でもさらけ出せる場所だったんだよね。

また、「スクラム」は、日常の関係性とは異なる情報を得ることができる。夏樹さんを取りまく受験に対する情報は、「ネガティブ」なもので溢れていた。彼女にとって「スクラム」は受験への不安を軽減させる「ポジティブ」な情報に触れる場所でもあった。

夏：「スクラム」では、受かる事しか考えてない、みんな。逆にポジティブすぎ？学校の友達には、ネガティブすぎ。

成：ネガティブすぎ。

夏：「絶対落ちる」って決定なの。

#### (4) 他の「スクラム」生

「スクラム」の子どもたちの人間関係をみていくと、いくつかのグループに分かれていることに気付く。しかし、互いに牽制しあうでもなく、排除しあうわけでもない。グループ内の拘束力はそこまで強いものではないようである。

すべての子どもたちはいずれかのグループに属している。つまり、スクラムの成員であれば、いずれかの「スクラム」生にアクセスできる。そして、そこには認め合う関係があるという。

康：分かり合える友達っていうのが、ここにはちょっといたんだよね。共通部分がある。で、こう、わかりあえて、あ、わかるよそれって。お互いの傷を舐めあうってことじゃないんだけど、認め合うっていうか、お互いの存在を。認め合ってくれて、で、「あ、自分は、この、メンバーっていうか、この冬月荘のスクラムの中においていいんだ」というか。存在、必要とされてるんだっていう。

#### (5) チューター

スクラムでは、法人の専従スタッフとボランティア・スタッフを総称してチューターという。ここには、スクラムのOG・OBも含まれる。

チューターは、子どもたちにとってアクセスしやすい編成資源となっている。チューターの子どもたちへの接し方は多様である。何とか勉強に対して内発的な動機を持ってもらいたいと教材を開発する者、高校の進学情報の収集と提供に心血を注ぐ者、受験勉強にポイントを絞って学習支援をしようとする者、おしゃべりをしに来る者。自分の宿題をする高校生や大学生、寝て過ごす者など。学習支援という枠からは、およそかけ離れた関わりであっても、「スクラム」では許容される。子どもたちも、勉強する者からゲームやおしゃべりに興じる者まで様々である。

子どもたちは、自分に合うチューターをみつけていく。大人を「こわい」存在として捉えていた麗華さんは、ある一人のチューターと話すようになってから、周りの人とも話すようになった。大人とのかかわりは、「すごい楽しい」ものとなり、「もっと話したい」という。

### 第3章 事例における自己肯定感の獲得プロセス

以上、編成資源論を手がかりに、「スクラム」という場の輪郭を描いてきた。その中で子どもたちがどのように自己肯定感を獲得していったのかをM-GTAを用いて示したものが図1である。以下、概念を【 】, カテゴリーを『 』として表記し、説明していく。

#### (1) 【「私」を肯定してくれる機会の喪失】から生じる『避難としての無干渉』

「スクラム」に参加する前の中学生は、『学校』に対して、みんなと仲良くするための自分を作り出すことに【友達疲れ】を感じたり、学校内の規範や文化に対して【均質化への違和感】を抱いていた。他方、『家庭』にかえっても親がいない、あるいはいても自分に関心を持っているとは感じることができないでいた（【「私」を肯定できる機会の喪失】）。

そのような『学校』と『家庭』の間を行き来する毎日過ごす中学生は、悩む自分を守るための手段として『避難としての無干渉』を自己防衛として身に付けていく。他者から関心を持たれない自分を守るために、「私」もまた周囲に関心を持っていないのだという論理を組み立て、【周囲への関心の喪失】が生じる。さらに、そこから「私」は他者から興味を持たれていないであろう、だからこの現状は仕方がないのだと【周囲からの関心の喪失感】が常態化していく。

(2) 他者への関心を回復する起点としての【「私」任せなかかわり】

そんな中学生が「スクラム」に参加すると【唐突な受容の試練】を受けることになる。いままで【してくれない】かかわりが生活の多くを占めていた中学生は、なぜこんなことを【してくる】のか理解できず、当惑する。

しかし、チューターや他の「スクラム」生による関わり方は【「私」任せなかかわり】である。すなわち、時間、情報、アイデンティティをはじめ他の「Scrum」生やチューターという資源をどう活用するかは裁量権は、拒否するという選択肢も含めて当人に委ねられている。

そうした他者からの関わりが継続的に提供され自分なりの反応を返すことができるようになっていく。受容できた【「私」任せなかかわり】は、『学校』や『家庭』では得られない共感できる情報を伴っている。このような情報に触れることで、【体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり】を感じるようになる。

他者とのつながりを獲得した中学生は、『他者とのかかわりに見る「私」の可能性』を見出していく。【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を感じ、少しずつ「スクラム」での自分に自信を持つようになり、他者と【「絡む」ことへの欲求】が芽生える。チューターの多様な人生経験に触れることで、あるいは自分と同じ境遇を持ちながらも生きている他の「スクラム」生の生き様に触れることで、「私にできることがまだあるかもしれない、こんな人生もあるんだ」といった【見えなかった選択肢の拡大】が起こり、人のかかわりに対する価値観や行動様式が変化していく。また、他者が「私」に心を開いて話してくれたという事実自体が【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を強化させていく。

(3) 【してくる】から【してくれる】へ、そして【してくる】他者を待ちわびる「私」へ

こうした人間関係の中で、中学生は徐々に自分が抱く感情に自信を持つようになっていく。自分

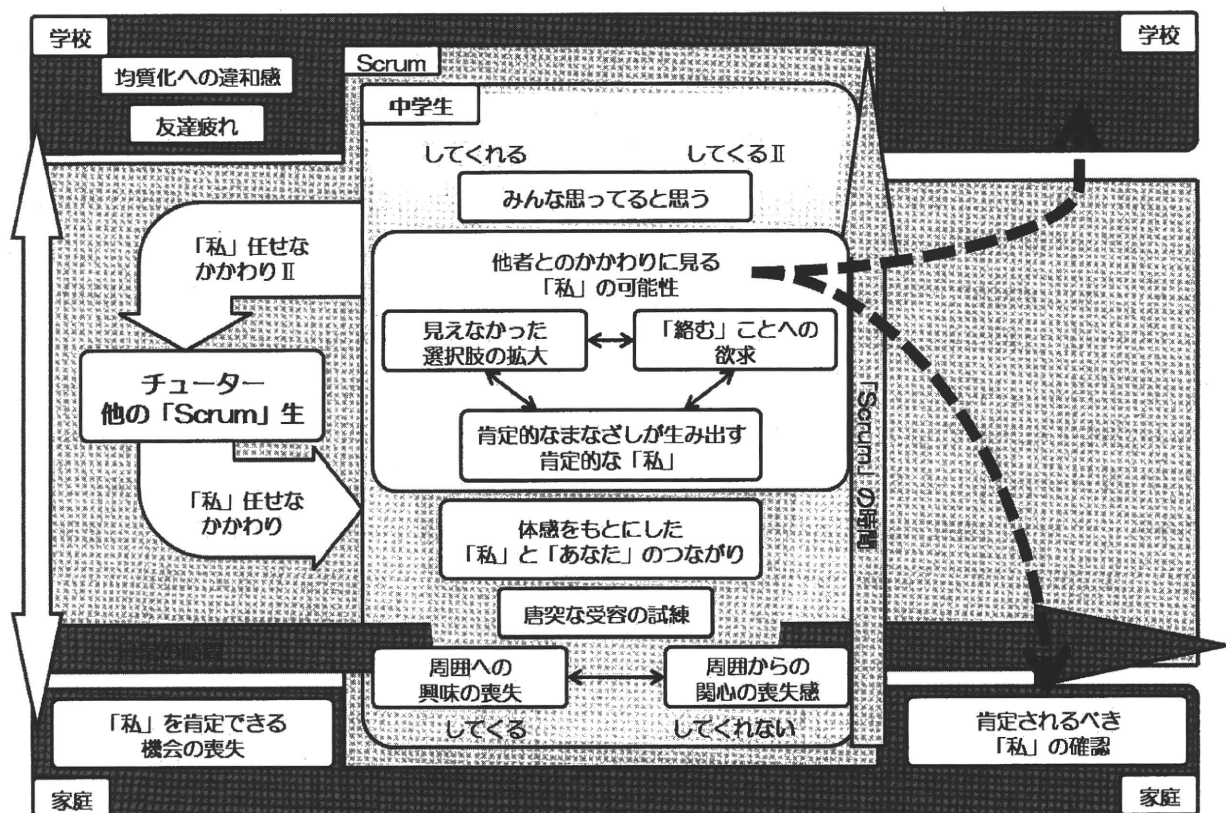


図1 事例における自己肯定感の獲得プロセス

が嬉しいことや苦しいことは、【みんな思ってると思う】ことに自信をもつ。他者と共感できる「私」を再発見したのである。

そうなってくると、当初はうっとうしい【してくる】ものであったチューターと他の「スクラム」生の【「私」任せなかわり】は、中学生にとって【してくれる】になる。他者からの働きかけは、「私」への関心や配慮にもとづいたものだというふうに解釈軸が変化したのである。

さらにそれは、うっとうしい【してくる】かわりさえも、されなければ寂しさを感じてしまう【してくる phase. 2】へと発展していく。この変化を促したのが、【みんな思ってると思う】という、共感できた自分に対する信頼である。以上のようなプロセスを経て、他者からの関わりを受容でき、他者へ働きかけることができる自分に価値を認めるようになる。

自分の存在を肯定的に認めることができた中学生は、チューターや他の「スクラム」生に【「私」任せなかわり】を働きかけ返す【「私」任せなかわり phase. 2】を行うようになり、次世代のチューターとなっていく。

#### (4) 「スクラム」外への波及

また、本研究では、「スクラム」で得られた自己肯定感が、家族関係の変遷を促す事例も見られた。「褒めたら伸びるタイプなのかな」と自分を評価する夏樹さんは、中学校1年生頃までは家庭でも勉強をしていたという。しかし、「誰が褒めてくれるわけじゃないし、一人で虚しく勉強してて、なんか、つままないかなと思って」やめてしまう。自分を肯定してほしい場面に期待通りの反応がもらえなかった。彼女にとって、「家庭」は自分を肯定してくれる場としての地位が低下していった。

そんな彼女は、「スクラム」に参加するようになって、再び家で勉強するようになる。チューターや他の「スクラム」生が努力する姿を認めてくれたからである。彼女に「スクラム」に来ての変化を尋ねると「家で勉強するようになった」と答え

た。さらに、続けてこう語った。

夏：で、初めて家で勉強した時に、お母さんが、「ココア入れてあげる」つつって、いきなり、部屋入ってきて、ココア置いてってくれた。すごいあん時感動した。

「スクラム」に参加するなかで得た【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】は、彼女をして、再び家庭でも机に向かわせた。その変化に呼応するかのようには、母親がココアの差し入れしてくれた。このやりとりは、家庭においても【肯定されるべき「私」の確認】を果たしたことを意味する<sup>12</sup>。

## 終 章

事例には他者と共感できる情報や、学校や家庭とは異なる時間の流れ、評価軸が配置されていた。こうした資源に加えて、子どもの変化には、共感できる仲間と受容的な大人の存在が不可欠であった。

同じような境遇にあるがゆえに、わかりあえる同年代の他者は自己肯定感の獲得には不可欠であった。経験や感情に対する共感が、他者への関心を取り戻し、他者に共感できる自分の再発見を促す。

配慮ある大人もまた自己肯定感の獲得には不可欠であった。インタビューの対象となった子どもたちは事業への参加当初、スタッフの一方的かつ積極的なかわりに戸惑っていた。しかし、そのかわりに対する反応は、子どもたち側に委ねられていた。子どもたちたちはスタッフのかわりに思い思いの反応を見せ、自己開示し、開示した自分が受容されていくことを実感していく。

最後に、事例で獲得された自己肯定感の質について触れておきたい。高垣(2004)は、自己肯定感を「共感的自己肯定感」と「競争的自己肯定感」とに区分する。前者が他者と共感できる存在としての「私」に対する信頼や肯定の感情を指し、後

者は他者との優劣の関係の中に自分の存在意義を見出すことである。「スクラム」の活動の興味深い点は、高校進学支援といういわば学歴競争社会におけるトラッキング・システムの一翼を担いながらも、そこでは「共感的自己肯定感」の獲得を促していた点にある。本研究が提出したモデルの厳密な適用範囲は「スクラム」に通い自己肯定感を獲得した中学生に限定されるが、それが競争的ではなく共感的なものであったのかについても間接的に示せたように思う。その意味で、他領域・他分野での応用が期待できるものであるといえる。

今後、獲得された自己肯定感が、どのように維持、変容していくのか、それを後押しする要因は何か継続的に調査していきたい。

## 引用文献

- B.G. グレイザー & A.L. ストラウス 1967=1996 『データ対話型理論の発見』(後藤隆也ほか訳) 新曜社
- Wallman, Sandra 1984 福井正子訳 1996, 『家庭の三つの資源』 河出書房新書社
- 『教育』2010年8月号 座談会「『ありのまま』でいられる場をともに作りだす」, 国土社.
- 木戸口正宏 2009 「Zっと Scrum—進学支援のための学習会を通じた子どもたちの居場所づくり」『住民と自治 2009年』8月号, 18-19頁
- 木下康仁 2003 「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実際」 弘文堂
- 佐藤一子編 『NPOの教育力』 東京大学出版会, 2004
- 城所章子・酒井朗 2006 「夜間定時制高校生の自己の再定義家庭に関する質的研究-「編成資源」を手がかりに-」『教育社会学研究』, 第78集 213-233頁
- 高垣忠一郎 2004 「生きることと自己肯定感」, 新日本出版社
- 田中道弘 1999 「Rosenberg の自尊心項目に対する回答理由の研究」 日本青年心理学会大会発表論文集 第7巻, 29-30頁
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」, 15頁
- 日置真世 2009 「人が育ち合う『場づくり実践』の可能性と必要性: コミュニティハウス冬月荘の学習会の検討」『北海道大学大学院紀要』第107号
- 久芳美恵子・齋藤真沙美・小林正幸 2007 「小, 中, 高校生の自己肯定感に関する研究」 東京体育大学紀要 第42号, 51-60頁
- 松井賢二 2001 「中学生の学校適応と進路(キャリア)成熟, 自己肯定感との関係(Ⅱ)」 新潟大学教育人間科学部紀要 第4巻 第1号 237-247頁
- 松井賢二・佐藤優子 2000 「中学生の学校適応と進路(キャリア)成熟, 自己肯定感との関係」 新潟大学教育人間科学部紀要, 第3巻, 第1号, 157-165頁

## 注

- 1 本研究は、成澤の平成21年度卒業論文をベースにしている。本稿執筆に際して、成澤がリライトしたものをさらに添田が加筆修正した。
- 2 本稿では、高垣の議論を参考に自己肯定感を「弱さやいたらなさを含めた自分の全存在に対する肯定的な感情」と定義する。
- 3 会場のコミュニティハウス冬月荘は、厚生労働省が全国に設置を進めているフレキシブル・センターのモデルとなった取り組みである。「スクラム」についても、NHKの全国放送などでも貧困の連鎖を断ち切る先進事例として紹介されている。
- 4 「スクラム」については、日置(2009)や木戸口(2009)の報告がある。また『教育』2010年8月号では当事者による座談会が掲載されている。
- 5 成澤は2009年1月、添田は2009年2月より。
- 6 分析者側の力量を鑑み、深く厚みのある分析を行うために、著者たちからみて最も変化した3名に絞りこんだ。
- 7 半構造化インタビューとは、構造化インタビューと非構造化インタビューの中間に位置するインタビューの形式である。前者は語りの主導権を調査者が完全に掌握し、事前に用意しておいた質問項目や流れに沿って行う。後者は、対照的に、語り手に語りの主導権を完全に委ねるものである。半構造化インタビューの場合、質問の柱を用意しつつも、語り手にある程度の主導権を委ね、臨機応変に対応するものである。ディテールの豊富なインタビュー・データを必要とするM-GTAにおいては、半構造化インタビューが適していると言われている(木下2003)。
- 8 このアイデアは、定時制高校において生徒が自己を再定義していくプロセスを描いた城所・酒井(2006)を参考にした。
- 9 M-GTAの手順を概略すると次の通り。半構造化インタビューで得られたデータから分析ワークシートを用いて具体例の対照性や類似性に注意しながら「概念」を生成・精査していく。概念間の継続的比較検討のすえ、上位概念となるカテゴリーを抽出する。最終的に、概念とカテゴリーを組み合わせ、事象の説得的なス

トリーラインを描いていく。詳細は、木下（2003）を参照。

- <sup>10</sup>とくにインフォーマントの一人である康平君は次のような感想をくれた。「サンゴ（成澤）ありがとう。おれ自身、ごちゃごちゃしていたのがすごくすっきりした」。
- <sup>11</sup>ちなみに、成澤は、「サンゴ」、添田は「フジイタカシ」。
- <sup>12</sup>学校での変化に関するデータは、今回は得ることができなかった。インフォーマントが3名と少数であったので、場合によっては生じていたのかもしれない。今後の検討課題である。

（成澤 弘明 釧路校大学院生）

（添田 祥史 釧路校講師）

## 生成された概念一覧表

概念 No.	概念名	定義	カテゴリー	具体例の一例 (ヴァリエーション)
01.	友達疲れ	友達の間係を維持するため、また、仲良くしてもらうために「仲良くしてもらえるように」振る舞わなければならない日常に疲れてしまうこと。「仲良くしてもらえるようなこと」をするかどうかの選択は本人に委ねられる。	学校	成：ふうん。学校に？ 康：そう。あの、自分から、こう、仲良くしたいなあって奴もいないし。かといってこう、仲良くしてもらえるようなこともしなかったから。なんか、なんだろう。む、群れ合うのが嫌だった。
13.	均質化への違和感	一定の価値基準が設けられ、その空間での在り方へ誘導しようとするかかわりを受けることへの抵抗を感じる。		康：学校ってのは、あの、だ、たいてい同じ人ができる。その同じ人っていうのは学校の指定する、理想像なの。
20.	「私」を肯定する機会の喪失	本来、肯定されるべき一面がかかわりのない状態に置かれることで意味を持たない一面へ変わってしまい、肯定する判断の上に置かれることがなくなってしまうこと。	家庭	夏：誰が褒めてくれるわけでもないし、一人で虚しく勉強してて、なんか、つまらないなと思って、家で勉強しなかったんだけど。
21.	肯定されるべき「私」の確認	肯定的に評価された自分が、別の場所でも肯定的に評価されることで、自分の肯定的に評価される側面に確信を持つこと。		夏：初めて家で勉強した時に、お母さんが、「ココア入れてあげる」つつって、(略)ココア置いてってくれた。
05.	周囲への関心の喪失	周囲にいる人などに関わる動機がないこと。また、動機がないことに対して違和感をもたない状態のこと。		成：何で？ 夏：学校の地味な人と話す気になんないもん。
10.	避難としての無干渉	相手のかかわりに対して自分の中に何も見出せない状態。相手とかかわることになんらかの害を被るため、かかわりを持たない場合も含む。	避難としての無干渉	夏：なんか、冬月荘きたら、そういう子が少ない。みんなおもしろい人で、限られてて。でも、学校行ったらまったく他人の人ばかりだから、なんか共感を得れない。
14.	周囲からの関心の喪失感	周囲の態度から自分への関心を向けられていないと思うこと。また、自分の周囲への興味のなさを投射した結果、周囲から関心をむけられていないと思う場合も含む。		成：なるほど。笑顔か。学校の教室に笑顔はない？そうやって。 康：ないわけじゃないけど、なんかこう、来たら「おうおう」みたいな。あのねえ、愛のねえ、反対語はねえ、無関心なの。



概念 No.	概念名	定義	カテゴリー	具体例の一例 (ヴァリエーション)
08.	見えなかった選択肢の拡大	これまで生きてきた中で、実現したいと思いもしなかった現状が、「Scrum」で実現する現象。実現したいことがあって、それは実現できるかどうかを考えるのではない。実現した後に、はじめてそれが実現したかったことに気付く。		康：まあ、当たり前っちゃ当たり前前なんだけど。こんなに簡単だと思ってなかったのさ。個性を認められるのが。
11.	他者との かかわりに見る 「私」の可能性	他者とのかわりに自分の変わることができる可能性を見出すこと。	他者との かかわりに 見る 「私」の 可能性	康：こんなにも出会いと機会と、(略)喜びと、時には悲しみもあるけれど、それもまたいいことで、自分っていう存在が成長する一つのステップにもなるのに、それを全部カットするってのは、ホントにすごいもったいないこと、だと、思うんだ。
17.	絡むことへの 欲求	ばらばらの関係を「つなぎとめたい」動機をもつこと。また「つなぎとめてほしい」と願望を持つこと。		康：全然違うように見えて、ここでは絶対あの、絡み合うんだよね。も、もしくは絡み合うようにする？
18.	肯定的な まなざしが 生み出す 肯定的な自分	「Scrum」の大人による放任に対して、肯定的な側面を見せることで承認され、その場にいる権利を得ること。		成：ほう。ウザいんだ。 康：(略)でもさ。「やあ、康平すげえな」ってこう、タカさんがさあ。「お前すげえな」って。
15.	「みんな 思ってると思う」	自分が感じていることを、他者も感じているであろうと、共感した経験をもとに自分の感情に確信を持つこと。	「みんな 思ってる と思う」	麗：(略)直接っていうか言葉には表わしてありがとうとか言えないけど、でも、絶対みんなは思ってるはずなんだよね。
19.	形式を問わない 肯定的側面の評価 (概念21.へ統合)	当事者の行動の質に関わらず、行動を成立させる要因のうち肯定できる要因を正当に評価すること。	-	
09.	体感を もとにした 「私」と 「あなた」の つながり	個体として切り離されている自己と他者の関係に、似た環境が生み出す境遇を味わったことをもとにすることで、感じ方に共通性が見られ、他者との話に動機を見出すこと。	体感を もとにした 「私」と 「あなた」の つながり	康：(略)母子家庭であることが絶対条件だったんだよね。だから、そういう境遇だから、何となくそんな話になって。うん。辛いよねっつてこう。

概念 No.	概念名	定義	カテゴリー	具体例の一例 (ヴァリエーション)
04.	「してくれない」	当事者が相手に対して、してほしい要求を持つとき、当事者の中で、その要求が果たされないものとして定義づけられる行為のこと。	中学生の 受容の形式	康：(略) 学校みんなはあれなんだよ。理解しあえない奴らだと思ったからなんだよ。で、今も知ってるんだよね。(略) 理解してくれないんだろうなあって。
02.	「してくれる」	当事者の内心にある、あるいは、当事者自身に意識されない要求を押し量り、当事者が要求しなくとも要求を満たす行為のこと。		夏：自分のためだけじゃないけど、(略) 誰かがあそこまでしてくれるってすごい。
03.	「してくる」	当事者が要求するに至らず、むしろ不必要なものとして把握していた働きかけを半ば強制的に働きかけること。		康：(略) 関係を持つってするってことが、あっちからしてくるもんだから(略)
03'	「してくる」 phase.2	当事者が要求するに至らず、しかし、なければならぬ、もの寂しくなる働きかけのこと。		康：(略) 腕相撲したっけ、勝って、で挑んでくるようになってきたから(略)
06.	唐突な受容の試練	かつてない他者の一方的なかかわりを経験し、かかわりに対する反応に戸惑い、思考停止、憤りなどの感情の起伏を持ち、場に対して自分なりの見解を見出さなければ存在していられない状況のこと。	唐突な受容の 試練	康：あのね、解けてったって、徐々にじゃないの。 成：徐々にじゃないの？ 康：ぶっ壊されたの。
07.	「私」任せなかかわり	当事者が他者から働きかけられたとき、その反応の内容は当事者に委ねられるかかわりのこと。	「私」任せなかかわり	康：(略) ほんと俺が必要としなかつた関係を持つってすることが、あっちからしてくるもんだから(略) でもなんかこう、徐々にこう、話の合う部分ができて。
12.	「私」任せなかかわり phase.2	「おそらく相手はこう思っているであろう」ことを確信しつつ、相手にそう思っていることを確認しないままに、自分の核心を基盤に相手に行為をはたらきかけること。自分の感覚に疑いがないことが前提としてある。	「私」任せなかかわり Phase.2	康：(略) あの、自分にとっての「Scrum」と、あと、周りにいる人にとっての「Scrum」は、あのお、その空間内で、あのお、なんだろう、こうお互いの感謝の心を共有できる。(略)
16.	異次元としての 「Scrum」	自分のアイデンティティを場によって変更すること。その場に適應するためのアイデンティティがあり、別の場所でそのアイデンティティは通用しない、あるいは強い抵抗を示す。	異次元としての 「Scrum」	康：ここで突然会うから始まるんだよ。(略) 康：学校でその関係を維持できるかって、それは無理なんだよ。

厚生労働省セーフティネット支援対策等事業費補助金事業

生活保護受給者自立支援にかかわる  
第二次ワーキンググループ会議報告書  
(平成 21 年度～平成 22 年度)

及び

釧路市福祉部生活福祉事務所関係分資料  
(平成 21 年度～平成 22 年度分)



釧路市福祉部生活福祉事務所

はじめに

釧路市の生活保護受給者を対象とした自立支援プログラムは、平成 16 年度から 2 年間の国のモデル事業を契機として、平成 18 年度から本格的に取り組み始め、平成 22 年度で 5 年間を経過したところです。

この間、地域の NPO や介護事業所、社会福祉法人等をはじめ、学識経験者や行政関係者等多くの方々のご協力があった、今日、一定の成果を生むことができたものと考えており、関係各位には心から厚くお礼を申し上げます。

思い起こしますと、私たちの自立支援プログラムの契機となった「被保護母子世帯自立支援モデル事業」の取組みは、全くゼロからのスタートで、何をどう取組んで行けば良いのか、手探りの状態で始まりました。その中で、一筋の光を見い出すことができたのは、ワーキンググループでの議論があったからだと思います。

まさに、その時の議論がその後の当市の自立支援プログラムの展開にも生かされ、全国から注目されるまでになったと言っても過言ではありません。

しかし、これまでの取組みの中で、新たな課題が見えてきたのも事実です。

私たちは、自立支援プログラムの取組みを開始してから 5 年目を迎えた昨年度から、更なる進化を見据えて、新たな形でワーキンググループによる議論を開始していただきました。その中では、これまでの当市の取組みで明らかになった成果や課題を洗い出すとともに、それをどう今後に生かし、克服していくべきかを議論していただきました。

詳細につきましては、本報告書にも掲載しておりますので、是非ご一読願いたいと思います。

さて、釧路市では、10 数年来水産業や石炭産業の低迷が続く、地域の経済や雇用も冷え込んでおり、この間有効求人倍率も 0.5 倍以下で推移しています。

こうした中、被保護世帯は増加の一途をたどっており、過去最高を更新し続けるという非常に厳しい状況に置かれていますが、私たちはこうした厳しい中であって、貧困に陥った市民の生活をしっかりと支えることが、生活保護の実施機関としての使命であると考えています。

また、市民 19 人に 1 人が生活保護を受けている現状からいえば、これをごく一部のものとして排除するのではなく、一市民として包摂しながら、それぞれが可能な範囲で役割を担っていただく、行政としてそうした場を提供する努力が求められていると考えています。

まさに、それが私たちの自立支援プログラムに取り組む基本姿勢だと言えます。

これからも厳しい状況が続くと思われませんが、生活福祉事務所一丸となって自立支援プログラムの推進に取り組んでいく所存でありますので、引き続き関係各位のご協力を賜りますようお願いいたします。

釧路市福祉部生活福祉事務局長

木津谷 康二